

『武道伝来記』 「大蛇も世に有人が見た様」 小考

大久保 順 子

『武道伝来記』（貞享四年「一六八七」刊）卷三の三「大蛇も世に有人が見た様」については従来、前半部の「龍」の出現の場面に謡曲『船弁慶』や『源平盛衰記』文覚逸話等の「著名説話が導入され」、「類似の構成をもつ、文覚が竜王を退散させる話を翻転して読者の意表をつきつつ興味を惹き」¹「武家の一面を諷する」という書き方をして「いる」¹との指摘がある。そうした本話の「読者に馴染みのある古典類の応用、転用」²は、へはなし³の造型にいかん作用しているのだろうか。話内の様々な言辞の配置を手掛かりとして考察したい。

一、

瀬戸内の海路は予州宇和嶋の主たる交通路である。宇

『武道伝来記』 「大蛇も世に有人が見た様」 小考

和島藩主伊達秀宗公・宗利公時代の参勤に関するものを始め、度々発生した風水害・海難事故等は、近世期の諸記録にも確認される。桜田数馬親敬『伊達家御歴代事記』³には、寛文九年三月に御見送衆の船が高山で遭難、藩士の清水茂兵衛・里見一郎右衛門（この年正月五日、五十石加増の記事有り）等が溺死した事故等の記載例がある。

（寛文九己酉）

・二月六日、一、大廻之御船着岸。

・（三月）三日、一、今日御出船。四日、一、高山二而

御見送衆船かへり、清水茂兵衛里見一郎右衛門溺死、

其外兩人之下人水主十二人果ル。十一日、一、右二付、

御機嫌伺又ハ右之代二須田隼人方遣。

・（五月）廿二日、一、高山二而破舟之御船頭与左衛門、

御扶持放。

・六月五日、一、御城方御普請支配、山崎式部方被仰付。
晦日、一、洪水在之。殊外痛よし。

・七月二日、一、細川越中守様御迎船十五艘、宮崎二而
破損。(中略)十七日、一、十五日之晩より風雨、十六
七日洪水。

・八月十二日、一、九日より風雨洪水。

*「近年度々洪水不作付、在々損申躰候条、万事其心得可有之趣等也」(寛文十年正月十二日、桜田主

水・数馬書付)

承応二年(一六五三)祭祀の和霊神社の縁起にも、参勤途中の秀宗公の海難事故の模様を伝えるものがある。後の実録作品等では、この事件は家老山家清兵衛の霊威として盛んに脚色されている。

・何レノ年ニカ参勤ノ船中ニテ難風ニアワレタル事有、
所ハ播州高岸前ニシテ、南風烈シク、上リモ下リモ不
叶、供船トモモ散々ニナリ、其身ノ乗舟モヤガテ高岸
エ吹付ラレ、微塵ニ可成計ニテ有ケレハ、何トモシテ
沖中エ船ヲトゞメ風ノ和ヲ待ヨリホカ手ダテ無リケレ
トモ、風強ケレハ碇トゞマラス、

・某時秀宗居直リ、顔色ヲ正シクシ大音ニテ申サレケル
ハ、夫主将ノ道ハ某身一人死シテ諸人ヲ助ル法ハ有リ：

トテ、近習ノ士ヲカエリミ、大脇差ヲ出セト云ヘリ、
…此辞ヲ聞ヨリ、皆々起リ手々ニ働テ船ヲ乗ト、メン
ト計ヲナス、…サテハ御運未^テ尽キサリケルトテ、猶亦
碇数多入テ沖中ニ船ヲツナキ得タリケリ、…天氣モ和
ラギ順風ニ成テ、ツ、カナク舟ヲ乗リタリケル、此時
諸人初テ秀宗ノ大勇ヲ見タリト、故人トモ語伝エタル
事ニテ侍リシ也、

(宝暦八年奥書『和霊明神御由緒』⁴)
また、「大蛇」の消えた「淡路が嶋の方」にも、古くか
ら「此鳴渡ト申ハ竜宮城ノ東門ニ当テ」(『太平記』卷十八
「東宮還御事附一宮御息所事」)、「阿波の鳴戸に竜女のか
碇あり」(『西鶴諸国はなし』序)「さぬきの國。房崎の浦
にて。竜宮へとられし。玉を」(同卷一の一)、幸若舞曲
『大職冠』他、瀬戸内関連の竜宮伝説が数多く伝わってい
る。地域のこのような海上怪異譚の例——記録・縁起類の
文体——との比較からも、卷三の三「大蛇も世に有人が見
た様」の怪異の叙述箇所における言辞の「虚構」の性質は
窺える。

この場面において、「導入」される詞章的言辞は、単に
読者に著名説話を想起させるだけではない。作品世界に登
場する人々が「興じてうたふ」「一曲」——「小船に棹差
して、五湖の煙濤を楽しむ」「御門出の、行末千代そと菊

の盃」(『舟弁慶』)・「面白や山水に、盃を浮かべては、流に牽かるる曲水の」(『安宅』)等——が、叙述と重なり合いつつ、まさにそこに起きる事件の進行そのものを導いているのである。「俄に海上震動して」以下の「龍」の出現場面にも、以下の詞章等の例のようなイメージが重なっているであろう——「あらず思議や海上を見れば」(『巴波の紋、あたりを払ひ、潮を蹴立て、悪風を吹かけ、眼もくらみ、心も乱れて、前後を忘る、ばかりなり』(『舟弁慶』)・「こはいかがせんと上下周章騒けり。思々に仏を念じ、口々に祈事して泣き悲みければ」(『波風やめて見せんとて、舟舳頭に立跨て、沖の方を睨へて、龍王や候龍王や候、いかに海龍王共はなきか、曳々とぞ呼だりける』(『念珠押捻、大の声のしはがれたるを以て申ける』(『文覚が云事、龍神の心にや叶ひけん、沖吹風も和て岸打浪も静也』(『源平盛衰記』卷十八「文覚清水状天神金事」)・「今日の難を、遁れつるこそ不思議なれ、たださながらに十余人、夢の覚めたる心地して」(『虎の尾を踏み、毒蛇の口を、脱がれたる心地して』(『安宅』)・「鳴るは瀧の水」(『安宅』)——「夕の夢見あしきに」が「あゝ去る夜の夢見悪かりける事は此事也とて、閑所の方へ行ぬ」(『源平盛衰記』卷十八「文覚高尾勧進附仙洞管弦事」)を連想させるならば、それは「勧進帳をさつとひろげ、調子も知ず、大音声を放上て

【武道伝来記】「大蛇も世に有人が見た様」小考

読之、勧進僧文覚敬白」「文覚勧進帳を取直して、拳も軸も一になれと把堅めて資行が烏帽子打落」(同、同巻同話)等に描かれた、荒々しい文覚像を想起させよう。弁慶説話と文覚説話という複数の著名作品のイメージの複合によって、そうしたいかにも典型的な(芝居にでも登場しそうな)勇者に喩えられた「石目弾左衛門」なる人物の武勇譚が発生する。

もとより本話の冒頭部の、船遊びの手繰り網の景色を描く「行春の桜鯛堺の浦に限らざりけり」の「行春」「桜鯛」から、「西鶴がしばしば用いている構文」⁷⁾と指摘されるレトリックの虚構は始まっていた。

堺の浦の桜鯛地引をさせて生きたはたらきを見せん⁸⁾
 (『好色一代男』卷五の五「一日かして何程が物ぞ」)
 ・行春の境の浦の桜鯛あかぬ形見にけふや引らん。これは為家卿都には見ぬ真那鯉飛魚のいきてはたらくに目を覚して読給へり。地引の網は春より折節こそ増されと岡田左馬の助といふ風流者にさそはれ。

(『男色大鑑』卷七の五「素人絵に悪や金釘」)
 為家歌による「桜鯛」と「堺・行春の縁」⁹⁾の和歌的連想に加え、この「構文」の諸例は、「引き網」が見ること、で味わうもの——目を驚かし喜ばしむる視覚的な風物——

を發想させることを示している。「嵐三右衛門もてなし。山の替りの海自慢細江の網の浦に網をおろさせ。かゝる気色を見せばや」(『男色大鑑』卷七の五)「是も湊と云所に置網引せて見にまかると亀源といふ男つれて行。日も昼にさがり淡路嶋に影移るを惜まれ見しに」(同)といった、浦々の引き網の景の用例も、この「構文」と同趣と考えられる。卷三の三の冒頭部では、「行春」の「堺の浦」から、それと比較して劣らない宇和島の引き網の景が導かれる。さらに、「元放於下坐。應曰。此可得也。因求銅盤貯水以竹竿餌釣。於盤中須曳引一鱸魚出」(『後漢書』方術列伝第七十二下)¹⁰等の左慈仙人の逸話と比較した喩え「下手な仙人より増に詠めの長して」によって、「入日を金柑に見なし浪の浮藻を水鉢に作」る「此景色」が、非常に美しい晩春の行楽の夕景として称揚されていく。その船客達が美景に「興じてうたふ」¹¹。當為此そが、あたかもその謡曲詞章のイメージのごとく展開する突然の非現実的な超常現象の叙述部分を導くことになる。

慌てふためく船上の武士たちの言葉や行動は、「船頭をあらけなく呵て」「啼出す」「念仏くりかへし」「船頭を呼」等の騒がしい混乱ぶりとして描かれる(これが弾左衛門の「大躬鎧を上段に構へ大音あげ」で鎮まる)。その一方で、「見る者肝をけし」「こんな所へ乗て来るものか。夕の夢見

あしきにこまいといふたを。女共がそれでは約束の義理が欠るといふて此様なこはい目をさせる」「涙ながら我屋敷の方を詠めやり」「目か舞ましてと舟底に息もたてず」「其中に石目弾左衛門」「海上を白眼つけたる有様のゆゑしき」「大蛇淡路が嶋の方へゆくとみへて気色しづかに浪おさまりみなく夢の覚たる心ちして」と、へ見るゝこと・へ目ゝに関連する言辭・用字が列ねられて叙述されていることに注意したい。船客達が「うたふ」謡に導かれるような叙述、その顛末が「見る」「目」尽くしの表現によって描かれていくことは、卷三の三の構成上からみて、おそらくは「読者の興味を惹く」のみに留まらず、この「龍」出現の顛末が文字通り「人が見た様」として「其後」「段左衛門手柄美々敷咄」されたことと関わっていると考えられる。西鶴浮世草子の「聞き手の内在する西鶴の地の文の叙述と、作中人物が聞き手となる「入れ子」型会話」¹²の方法が用いられているとすれば、この場面の叙述は、(臆病な当世風武士たちを作者が批判している、というよりもむしろ)作品世界内に登場する人物たちもまた、このような「咄」を多少の誇張や脚色(或いは有名な謡曲舞曲等の詞章取りを交える等)を用いつつ「見た様」として「美々敷」興味深く語った、ということの意味しているのではないか。

それは余りにも超現実的で、辛うじて生還した目撃者た

ちも確かに「見た様」とは言いながら「夢の覚たる心ち」がするような「咄」であった。そしてそれが一種の「はやり詞」を生むような武勇の称揚と滑稽な笑いの「咄」になっていったこと——事件の当事者の関知の埒外で（いや、埒外だからこそかもしれない）、「咄」の伝聞が人々の「沙汰」となり、さらには「いはずしてあらはれし」「悪口」や、符丁めいた「はやり詞」にまで膨らんでいくこと¹²——は、充分有り得る経緯である。本話前半部の「古典類の応用、転用」とは、そのことを本文の叙述上に形象化する方法なのではないだろうか。

二、

「此さたしかときかぬ男の由来を尋ね」ることは、まさにその噂を拡大するような営為以外の何ものでもない。へはなし¹は、その談話の「其夜は五月雨ふりすさみたるつれぐのしめやかなる」場面へと巧みに切り換わる。ここでは、「つれぐと降り暮らしてしめやかなるよひの雨に」「品ぐをわきまへ定めあらず¹³」（『源氏物語』帚木）のような雨夜の品定め¹⁴の趣向を匂わせる「長座」で、人々が「腰拔の取さた座中大笑ひ」する状況が設定されている。その時、亭主の井田素左衛門宅を訪ねた念友の成川瀧之助の「ふと耳に入はつと思ひ。暫した、すみて聞届」る形

で、噂は伝わる。この場面では、これまで本話の前半部に記されてきたような「咄」が談話として人々に語られていたと考えられる。ここで咄の説明叙述が繰り返されることはない。その行為を「犢鼻褌まで放して」と具体的に笑う態度でありながら、船上のどの「不首尾」者が何をしたかはつきりと主語を対応させた説明的な叙述は、前半部の「龍」出現の場面にはなかった。「成川専蔵木村土左衛門が臆病の事」と「夕の夢み十日にならぬ祝言」とは、本話の中で読者にも符丁として呈示されている。それはいかにも「噂」がそのように咄され、聞き伝えられていく、という書き方である。一方、来訪者三名の名は列挙されているが、「玄関迄音信たる」瀧之助がその談話の座を直接へ見た¹⁵とは書かれていない。彼は「取さた」の「今の物語」の声の主を「聞届」け、その中の「久米田新平相手に不足なし」と判断したことになる。素左衛門との約束を邪魔された形になり、瀧之助が父の「取さた」に「堪忍ならぬ所なれ共」「こ、は分別所なり」と帰ったこと、後に「最初の意趣をこれにたくみかへたる心底」を企図したことから、瀧之助自身もまた、長居の客たちに自分の来訪を察せられていないと判断しているとみられる。暗示的な叙述ながら、へ見えない¹⁶もの——瀧之助の鬱屈した「無念」を「色に出さず時を過し」蟠¹⁷っていく状況——が、そぼ降る夜の雨の中

で密かにへ聞く「音」によって進行していくのである。

請太刀の稽古場での喧嘩の「それではとまるとまらぬと穿鑿」の中で、新平は憚らずに「生若輩」と罵った上、竹刀では「其証據しれず」「瓜の葛に茄子はならず」と呟く。立合稽古から真剣勝負への展開——例えば「三巖此の勝負見分けられずば是非なしとて座に着る。浪人弥よせきて、さらば真剣にて御立合下さる可しと望む」(『撃剣叢談』巻一「柳生流」)¹⁴等の武道漸の定番の構図で言えば、冷静な剣豪に焦って挑み、倒される敵役の役まわりに当たたるかもしれない——において、勝負の証拠を求め「おとなげなくせて」言いつのる新平、という短い記述にも、この人物の型が端的に表現されている。彼の姿には、以前の雨の夜に噂話を「物語」り瀧之助の「親仁の卑気」を与えたような人物——それこそ「証據」の定かならぬ「大蛇」の話を、いかにも見てきたように得意気に語って無遠慮にその座を盛り上げ、大笑いさせるような男——のイメージが重なる。先夜の「所詮今の物語は」の認知の中に憎悪を匂わせ、無念を「色に出さず」「たくみかへたる心底」を隠している瀧之助とは、反りの合わなそうな対照的な性格の男の像が浮かび上がってくる。

しかし、瀧之助が「さいわひの所」¹⁵と云って得た機会にも関わらず、実際のその後の椿原での決闘は、様々な不本

意さと誤認に満ちた、非常に心許ない展開——すなわち、

①相手を新平と思つて富坂弁四郎と斬り合う瀧之助の誤認、
②その長時間の斬り合いでの疲労と負傷、瀧之助の劣勢、
③弁四郎を倒すも、助太刀の念友素左衛門の死(瀧之助の落胆、両者の助太刀が先に死に、当事者同士の決着がつかない)、④瀧之助の小声に油断し斬られる新平の状況誤認、
⑤相手を倒し本望を達するも、力尽きて死ぬ瀧之助(切腹の失敗)——となる。この「誤認」の決闘は、「心得がたし。然れ共むかふ者をきはす」(巻三の二「按摩とらする化物屋敷」)のような、名乗った相手を身代わりと認めた覚悟の上での決闘とは異なる。「言葉をかけし」瀧之助に弁四郎が「わざと言葉をかはさず」切り結んできた本話の場合は、「五月闇のあやめしらず」の言辞に導かれた夜
の状況が重要な意味を持つ。この「しのぎより出る火は螢のごとく飛びだれ」る程に相手の区別・認識(文目)の困難な闇の中で、彼らは「言葉をかけしに」「わざと言葉をかはさず」「瀧之助はいづかたにといふに驚き」「無念といふ声を最期に残しぬ」「此音を聞て力をおとし」「思案迫し小声になつて南無あみく」と二三返となへ」「誰か有はやくとどめをさせといふ声に新平氣をくつろげ」と、声・音を頼りに辛うじて認知し、戦うしかない。前述の「五月雨」の夜の「声」の立ち聞きと結末の闇(夜)の中の決闘——

瀧之助の「武士の心底」が展開するべき場面——、すなわちこの「見えない」〈音〉の世界は、前半部の「入日」(夕)に「龍」を「見る」〈目〉の世界と極めて対照的だ。そして、負傷し弱り果てた瀧之助もまた、「何ぞと問し白玉の椿が原の露と」消え、深い闇の静寂だけが残ることになる。

「衆道にまつわる敵討ちをあつめた」⁽¹⁵⁾とみられている巻三の四話の比較からも、巻三の三の特質は指摘できる。化物退治譚が敵討ち事件の「武道のほまれ」と繋がり「此武士の本意、あらまほしき」公的敵討ちの成功談となる巻三の二「按摩とらする化物屋敷」は諸国咄怪異譚の要素を前半部に持つ点において、また、無分別な悪口から争いが発生する巻三の一「人差指が三百石」は、私闘的な事件の性質において、それぞれ巻三の三と共通しながら、結末の全く異なる話として映る。衆道関係の関与の点でも、巻三の二では助太刀の側の人物の心理・行動が詳細に描かれ、巻三の四「初茸狩は恋草の種」では衆道の三角関係が「一名不在の二者間の場面」で展開していく趣向がとられ、各々が別話として造型されていることが認められる。さらに『武道伝来記』の諸国咄的性質上、九州や東北地方など周縁の地方の事件話に怪異譚的色彩が濃い⁽¹⁶⁾、という点において考

『武道伝来記』「大蛇も世に有人が見た様」小考

えた場合、巻三の四「命とらる、人魚の海」の人魚出現・探索の顛末とも本話は異なっている。巻三の四の中堂金内が「半弓をおつ取」「手こたへし」たことは、「かくれなき金内が矢の根」によって「さふらひの名をあげける」名譽挽回の結果に繋がるが、巻三の三の「見た様」において、金内の放った「矢」や「目なれぬ魚」の本体のような事後の物的証拠は登場しない。辛くも敵を倒しながら瀧之助が「露と消」えた後には、何が残ったのだろうか——といった感触は、視覚的に眩くもそもそも実体の定かではない「見た様」が、「夢の覚たる心ち」の後に「咄」として夜の中で語られ、それを契機として起こった決闘が闇の中に終わる、という、一話の「はなし」の仕掛けによってもたらされる。「分別所」の計画をした瀧之助が「当の相手にさえ、ついに真の「意趣」を告げることではできなかった」⁽¹⁷⁾という結果も、結末の闇と相応している。

「夕」に「見た様」の「夢」が覚め、ありふれた日常的空間の「咄」の「沙汰」〈伝聞〉や「喧嘩」を経て、「夜」の「見えない」〈闇〉の中へと事件が切り換わっていく——和歌・詞章や物語のイメージが重層する「古典類の応用」の趣向は、本話の前半部のみに留まらず、「白玉かなにぞと人の問ひし時露とこたへて消えなましものを」(『伊勢物語』第六段)⁽¹⁸⁾を踏まえた結末の表現に至るまで、この決闘事件

をへはなしとして形象化するために効果的に生かされ、構成されているのである。

本話の「趣向化」の例は、すなわち『武道伝来記』という作品の「虚構」の性質のひとつのあり方を示してはいないだろうか。本話の結末の登場人物たちの「実質的には、相討ちに等しい死に方」⁽¹⁹⁾を、武士の敵討が単純な成功に終わるとは限らないという現実を描いた「死の場面の現実性ある作品」⁽²⁰⁾らしさ、として、読者が何らかの「虚構のへ真実」や認識——噂に興じ翻弄される当世の武士の有様に対する作者の批判的態度・詠嘆、等を含めて——を読み取るべき「行間」は、多分に残されている。一方で、その趣向によって創られていくへはなしの興味とは、本質的に「虚構」の興味に他ならないであろう。描かれた事件が事実か否かのレベルの問題以前に——またたとえ作者の精神に「諸謔のもつ非情さはなく」⁽²¹⁾詠嘆があったとしても——、「虚構」のへはなしにおける趣向の方法によって、主人公（武士であれ誰であれ）の真摯な行動や思惑をも相対化・対象化する造型がもたらされ、何らかの逆説性を孕む可能性は、充分にある。「武士」の誠・実を描くことを主張する棕梨一雪の『日本武士鑑』（元禄九年「一六九六」刊）序の「猥がはしき虚妄の説」批判は、（その敵討が事実か否かの問題のみならず）一つにはそうした西鶴浮世草子の

「へはなし」のつくりかた」の本質性に対する嫌悪の意思表示とも考えられるのだが、このへはなしの創作方法意識を顕著に窺える巻三の三の例などもまたおそらくは、その意味での一雪的「批判を免れ得ないものであるかもしれない。しかしそのへはなしの方法こそが、へ見た様」なるものの怪しさ・へ見えないものの危うさを描くことを可能にしている。

注

- (1) 谷脇理史氏「西鶴作品における典拠の問題（下）——『武道伝来記』を中心に——」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要（文学・芸術学編）』第37輯、平4・2）
- (2) (1) 同氏論文「同（上）」、同雑誌第36輯（平3・3）。
- (3) 三好昌文氏他編『記録書抜 伊達家御歴代事記 一』（宇和島藩庁・伊達家史料七、近代史文庫宇和島研究会、昭56・10）所収。以下、資料引用における傍線は引用者が付した。
- (4) 愛媛大学国語国文学研究室編『和霊神社縁起物語集』（愛媛大学文学資料集3、平4・3）所収。「宝暦八年戊寅初夏廿三日」の奥書を持つ、当神社縁起で最も古い写本の一。御家騒動としての事情や当地の和霊への畏怖といった背景から、当時の口承の存在が推測されるに留まるが、児玉・和霊といった神社名に窺われる鎮魂性より「このことは、清兵衛の霊威の物語がこの時点ですでに成立していたこと

を物語ってはいないだろうか」とする、白方勝氏解説の指摘がある。

- (5) 堀章男氏「西鶴と鳴門(上)——説話における地名の一考察——」(『語文と教育』第6号、平4・8)に、『日本書紀』卷十三の男狭磯伝説他、多くの説話の指摘がある。

- (6) (1) 論文「西鶴が…文章を一々参照しながら書いているとは思われず、おそらくは記憶に存するものを種に転じかつ翻案しているのであるから、字句を一々に対比すること自体がさしたる意味を持たない」との指摘もあり、作者がその字句を必ず引いたとは限らないが、西鶴の典拠考の諸論の方法と同様、主なイメージの流れを追うために便宜上引用する。本文は、『謡曲百番』(新日本古典文学大系57、岩波書店、平10・3)、『源平盛衰記 上』(有朋堂文庫、昭2・4)に拠る。

- (7) 平林香織氏「『西鶴諸国はなし』論——卷四の五「夢に京より戻る」の世界——」(『文芸研究』第117集、昭63・1)

- (8) 本論中の『武道伝来記』本文は『定本西鶴全集 第四卷』(中央公論社、昭39・12)に拠る。以下、西鶴浮世草子作品本文の引用は『定本西鶴全集』(中央公論社)所収本文に拠る。

- (9) 同(7)。

- (10) 『和刻本正史 後漢書(三)』(汲古書院、昭47・2)影印に拠る。その他、『有象列仙全伝』(慶安三年刊、京都藤田庄右衛門板、九卷三冊(合一冊)、架蔵)卷之三には次の逸話がある。

『武道伝来記』「大蛇も世に有人が見た様」小考

左慈。字元放。廬江人。於天柱山中精思學道。得石室中丹經。尤明六甲能使鬼神。坐致行厨。变化万象。曹操召見。閉一室。斷穀暮年。出之。顔色如故。操嘗宴賓曰。今日高會。所少松江鱸耳。慈因求銅盆貯水以竿釣之。即得鱸。操曰。恨無蜀薑。慈曰。易得。操恐近取即曰。前使買錦。可報增二十段。慈曰。諾須曳袖中出薑後買錦者回。果云是日得報增錦。操出郊。士大夫從者百許。慈為齋酒一升。脯一斤。手自斟酌。百官莫不醉飽。操怪之。使求其故。行視語廬。悉亡其酒脯矣。操惡其怪因坐上收慈欲殺之。慈乃卻入壁中。霍然不知所。或見於市者。捕之。而市人皆變形與慈同莫辨誰是。或逢慈於陽城山頭。因復逐之。遂走入羊群。操知不可得。乃令使告之曰。不復相殺本試君術耳。忽有一老羝屈前而膝人立而言曰。遽如許。使欲取之。而群羊數百皆變為羝。並人立云遽如許亦莫所取焉。

- (11) 中嶋隆氏「西鶴「會話文体」の遠近法」(『日本文学』第48卷第10号(通卷556号)、平11・10)

- (12) 拙稿「『本朝二十不孝』「跡の刻たる嬬入長持」論」(『文化』第55巻第3・4号、平4・3)。「沙汰」は、武家物の場合でも、人物の社会的関係と「面目」意識に重要な作用をもたらしているとみられる。

- (13) 新日本古典文学大系19『源氏物語 一』(岩波書店、平5・1)

- (14) 『新編武術叢書』(人物往来社、昭43・5)所収・源徳修「撃剣叢談」(天保十四年頃成立)巻一に、立合後真剣勝負

を求めた浪人を倒す柳生三蔵の逸話がある。同書巻四「丹石流」では、東軍流・川崎鑰之助の末流として「筑前福岡に此の流多し」「承応明暦の頃備前に松本何某と云ふ者、此の流を伝へたり」「今讃州には丹石流往々有りし由、近比聞きし也」とある。

- (15) 西島攷哉氏『「武道伝来記」の成立』（『武庫川女子大学紀要』第31集、昭59・2。『西鶴と浮世草子』（桜楓社、平1・11）所収）

- (16) 野田千平氏『武道伝来記ノート——副題「諸国敵討」としての考察——』（『名古屋大学国語国文学』第7号、昭36・8）、黒木千穂子氏『「武道伝来記」の研究——諸国咄としての一側面——』（『大妻女子大学大学院文学研究科論集』第9号、平11・3）

- (17) 井口洋氏『続「武道伝来記」試論』（『西鶴試論』和泉書院、平3・5）

- (18) 新日本古典文学大系17『竹取物語 伊勢物語』（岩波書店、平9・1）

- (19) 同(17)。西鶴が武士への「批判」を「むしろ意識せずして、そうしたものを書いた」（中村幸彦氏「西鶴文学における武家」『国文学』第2巻第6号、昭32・6）とする見方もあるが、瀧之助の「策謀」の結末が「その「武道」の徹底とはいいたいことの象徴であつたかもしれない」との井口氏の指摘がある。

- (20) 白倉一由氏『「武道伝来記」の世界』（『西鶴文芸の研究』明治書院、平6・2）

- (21) 矢野公和氏『「武道伝来記」の世界——制度に封じこめられた情念——』（『共立女子短期大学文科紀要』第19号、昭50・12）